



ポムという男の子がいました。
ポムは、ちょっとおくびょうもののしろくまです。





ある日ポムは、いつものさんぽみちを下をむいて
とぼとぼ歩いていました。
すると…



大きなポムの足もとには、
ちっちゃなアリがいたのです。



「ご、ごめんよ。アリちゃん。だいじょうぶかい？」

「アリちゃんじゃないわ！わたしはチャムよ！」

あなたは？あなたしろくまさん？大きいわねー。

それにあなた下ばっかむいて歩いてどうしたのよ？」

チャムのおしゃべりはとまりません。

ボムはチャムのおしゃべりにびっくりしながら、

「ぼくはボム。ぼく、こんなに体が大きいのに、すごく
こわがりなんだ。

だからみんなみたいにかっこよくならないとなかまにいれて
もらえないんだ…。」

「あら。そうだ！いいこと思いついたわよ！
わたしがボムをかっこいいしろくまさんにしてあげる！
トレーニングするのよ！ね！きまり！」
「ほんと？みんなみたいにかっこよくなれたらなかまにもいれてもらえる！」
「よし！あしたからトレーニングするわよ！」



こうしてポムとチャムのトレーニングは、はじまりました。
「まずは、ふっきん10回よ！」



しかし…。



「ううう…。」

ポムは1回もできません。

「次はマラソン！」

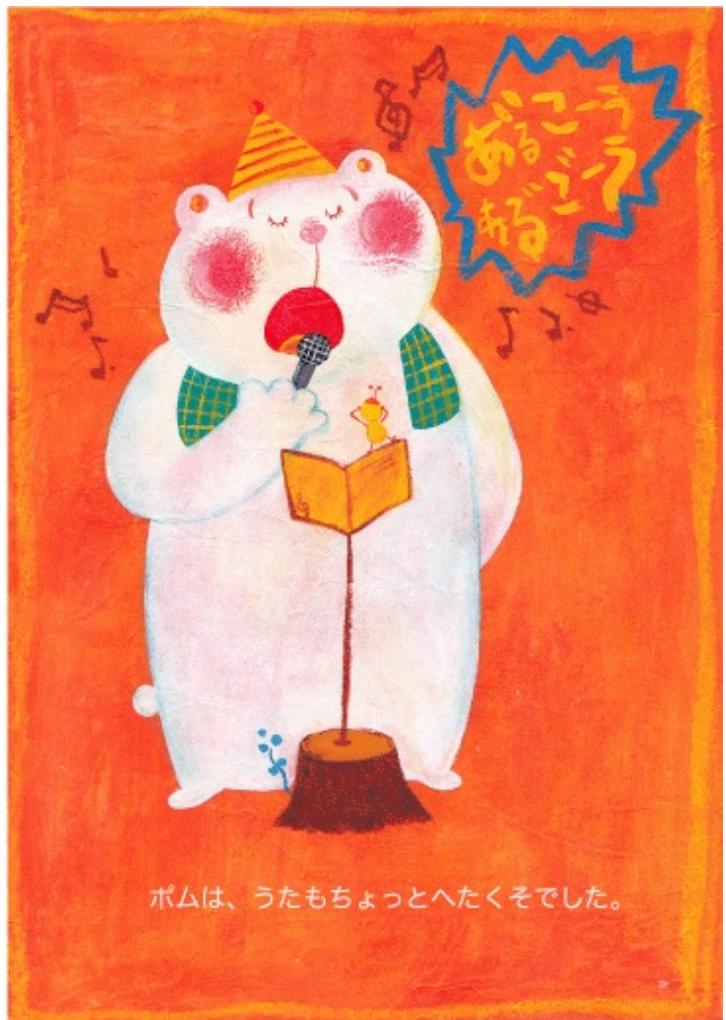


「はあ…。チャムは早いなあ…。」



ボムは、アリのチャムにも負けてしまいます。

「次はうたよ！」



ボムは、うたもちょっとへたくそでした。



何もうまくできないボムは、ちょっとおちこんでしました。
「やっぱりぼくは、みんなみたいにかっこよくなれないんだ…。」

チャムはボムをはげまします。
「だいじょうぶ！ あしたもがんばるのよ！ くしゅん」

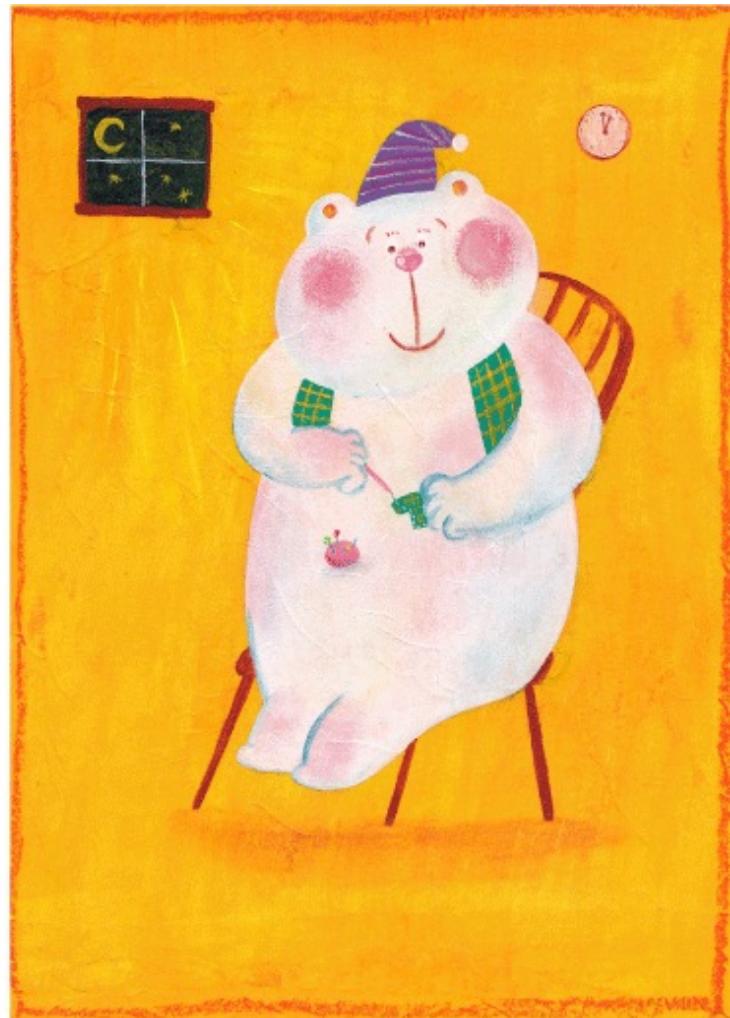


ポムは、いつものさんぽみちをまた、下をむいてとぼとぼ家にかえりました。

その夜。

「あ、そうだ…。」

ポムはなにか思いついたようです。



次の日。

「おはよう、ポム。くしゅん」

「あ、そうだ。チャムに。はい。」

ポムは、チャムがくしゃみをしてさむそうに
していたのをみて、チャムのためにちっちゃな
チョッキをぬってあげていたのです。





チャムはボムをぎゅっとしました。

「ありがとう。
ふっきんできないし、
走るのおそいし、
うたもへたくそだけど、
こんなやさしいきもちをもってるボムが
せかいで1番かっこいいわ！」



今日もポムは、いつものさんぽみちを歩いています。
上をむいて。
ちょっとへたくそなうたをうたいながら。

おそろいのチョッキをきた、チャムといっしょにね。



お わ り

